



表紙 **コンポジション**
ビエト・モンドリアン画
解説は30ページ
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

彼岸へ赴く夕日に
——一つの視座からみた遺跡——……………水野正好 4

「鑑真大師像回国巡展」随記……………鷺塚泰光 7

〔報告〕
ヨーロッパの新しい劇場
——英国国立劇場に我が国の
第二国立劇場(仮称)の計画を重ねつつ——
……………吉井澄雄 10

〔随想〕
歌舞伎の改革……………福原匡彦 12
大衆芸能の系譜……………田中英機 14

文化庁ニュース
国立美術館所蔵内外美術名品展の開催について……………16
「ポンピドゥ・センター／20世紀の美術」……………16
エーゲ海キュクラデス諸島出土
「ギリシャ美術の源流」展
——グーランドリス・コレクションから——……………17
「現代ガラスの美——ヨーロッパと日本——」……………18
第4回日本民謡まつりの開催……………19
昭和55年度国語問題研究協議会の開催……………20
第10回移動芸術祭秋季公演、9月から全国各地で……………20

祭礼歳時記シリーズ ⑤
9月の祭り……………天野 武 24

海外文化行政事情シリーズ ②〔CDI報告書から〕
全米芸術・人文科学財団……………松野 精 26

著作権シリーズ(15)
著作権の制限——試験問題としての複製——
——点字による複製等——……………29

国立劇場ニュース……………31

「鑑真大師像回国巡展」随行記

驚塚泰光

（文化庁文化財保護部
美術工芸課文化財調査官）



今年の春、中国の揚州市と北京市で国宝「乾漆鑑真和上坐像」の巡回展が行われた。唐の天宝元年（七四二）秋、入唐留学僧栄叡と普照から伝戒の師の招聘を懇請された和上は直ちに願いを受け入れ、

山川異域
風月同天
以寄佛子
共結米練

の言葉で決意を表し、弟子の派遣を考え彼らに図ったが、当時の危険な航海のことを思い誰一人として名乗りを上げる者はなかった。これに対し和上は「お前たちが行かないのなら、この私が行こう」と強い決心をされた。それ以来五回の渡航失敗（密告・難破・漂流）を重ね、自らは両眼を失明するという困苦、また栄叡と最愛の弟子祥彦を失うという不幸にもめげず、唐の天宝十二年（天平勝宝五年「七五三」）十二月遣唐使船でようやく薩摩国秋妻屋浦（鹿児島県川辺郡坊津町秋目）に着かれた。翌年平城京に上り、東大寺に戒壇を設け、聖武太上天皇・孝謙女帝

をはじめとする四百余人に戒を授け、天平宝字三年（七五九）に唐招提寺を開き、同七年（七六三）この地で七十六歳の天寿を全うして示寂されたことは『唐大和上東征伝』等でよく知られるところである。

和上が伝戒の師として当時の仏教界の中心的立場に立たれたことは当然であるが、絵画・彫刻などの芸術、建築学、薬学の発展にも多大な功績を残されたことも忘れてはならない。盛唐の優れた文化の伝達者であり、日中交流の先覚者である和上を、中国の地へ一度お還ししたいという希望は、既に一九六三年の鑑真和上円寂一二〇〇年記念の頃から、日中両国間で懸案となっていたが、政治的にも未だ国交が正常化しておらず、脱活乾漆造という極めて脆弱な国宝を安全に展覧することにも不安があつて、機はなかなか熟さなかつた。

ところが、一九七八年十月日中平和友好条約の批准書交換のために来日された鄧小平副総理に対し、森本孝順唐招提寺長老が、和上像の里帰りを實現させてほしい旨申し出られたところ、

鄧副総理は直ちに「和上と長老をお招きします」と答えられ、にわかには鑑真和上像の中国展が実行の軌道に乗ることになった。ちょうどその頃揚州に滞在中であつた筆者は、地元の人にこのニュースを聞かされ驚いたものである。その後日中両国では像の重要性に鑑み、慎重に事を運んできた。たまたま一九八〇年に創立三十周年を迎える大阪の朝日放送株式会社が、唐招提寺に対し経済的な援助を申し出られ、日中間の交渉には日本中国文化交流協会が当たることになつて、日本側の主催はこの三者にほぼ決定したのが昨年の春で、非公式に文化庁に対し計画の相談が行われた。その後開催期日の交渉が繰り返され八〇年の春という線で合意が得られた。

国宝の海外輸出は文化財保護法で禁止されており、当然文化財保護審議会に諮問して、許可の答申を受けなければならぬ。そのためには輸送経路・会場の安全性を確認する必要があり、昨年十一月末に事前の調査団が派遣されて中国側主催者である中国仏教協会、中国日本友好協会をはじめ国家文物事業管理局、中央広播事業局、中国民用航空の関係者と綿密な打ち合わせ、合意が行われた。これを受けて国宝鑑真和上像の輸出許可がなされ、正式に今回の計画がかたまつた訳である。

一月以降、空調設備のない会場での公開にも耐えうる湿度調整設備のついた陳列ケースの設計が始められたが、これには唐招提寺御影堂の長期にわたる温湿度測定の結果と中国気象台から送られた平成四、五月の揚州・北京の気象条件が参考にされ、ケースの細部については一九七七年パリ市ブチ・パレ美術館での公開の経験が大いに役立ち、理想的な条件に近い結果を得

ることができた。

桜花爛漫の四月七日唐招提寺に梱包資材が搬入され、翌八日朝から発遣供養の後、鑑真像の梱包にかかった。今回の鑑真像用コンテナは鉄骨ジュラルミン製の二重箱で、各箱の内側には一〇〇ミリを越える断熱材が貼られ、その内部を木製箱とした厳重なものである。これは上海揚州間の三四〇キロに及ぶ陸送中の温湿度変化にも影響されないように設計したためで、像は通常の如く、薄葉紙で養生し、綿蒲固を当て晒木綿で巻いてこれを麻紐で固定する方式を取り、内部の空間には一〇キログラムの六五％に調湿されたゼオライト・ペレットを封入の上密封した。

展示団の第一陣は上海での最終打ち合わせと機材の確認をするため、四月十日大阪空港を出発し、鑑真像は十三日朝奈良を出て午後三時十五分、日本航空チャーター機（貨物便）で上海に向け飛び立った。東シナ海上空は日頃でも気流が悪く揺れることが多いが、当日はかなりの振動があり、同乗の森本長老は「鑑真さんの東渡の経験を味わわされているんですね」と述べ、当時は異常気象でミゾレが降り暴風が吹き荒れる最悪の条件であったが、厳重な梱包のため作品に対する心配は一切なかった。空港には四百人近い関係者の出迎えがあり、回国巡展に対する熱の入れようがうかがえた。後で聞くところによると、中国仏教協会代理会長趙樸初先生を委員長とする歓迎委員会が全国組織で構成されたこと、文字どおり「熱烈歓迎」であった。着陸後直ちに飛行機からトラックへの荷物積み替えが雨の中で行われた。鑑真像輸送のト

配布されたが、希望者が多く、途中から一枚の券で数人が入場できるような応急対策がとられた。正確な入場人員は把握できないが、早朝五時半から夕刻七時前まで開き、七日間で五十万人以上の人が参観したのと思われる。我々としては単に偉大な先覚者の肖像としてのみならず、芸術作品として時間をかけ十分に鑑賞してほしいが、中国側の要望もありそれが果たせなかったのが残念である。観客は揚州に限らず江蘇省・上海市全域に及んだ模様で、参観後の感想を聞いてみると「鑑真和尚の不撓不屈の精神を、四つの近代化のために学ばなければならぬ」というのが圧倒的に多く、「すばらしい芸術品であるが、もう少しゆつくり見たかった」というのがそれに次いだ。感想はともかくとして、我が国で行われた「ミロのヴィナス」や「モナリザ」を思わせるような感があった。揚州をはじめとする江蘇省歓迎委員会としても予想を遙かに上回る観衆で、民衆の要望に応えるべく最善の努力をされた結果と理解している。揚州での梱包後、四月二十八日「友好・友好・中日友好」の声に送られて出発した鑑真和尚像は、二十九日、空路上海から無事北京に到着した。天候にも恵まれ、首都のことだけあって、歓迎は上海にもまさるものであった。到着後直ちに歴史博物館に搬入したが、館の前の広場は二千人を越える歓迎の列で、爆竹も加わり正にお祭り騒ぎの状態であった。博物館はさすがに設備も整っており、我々が要求する条件にも早く環境を整えることができた。五月四日の開会式は宇宙中継のテレビ放送を通じて御覧になった方々も多いものと思う。歴史博物館は壮大な建物で、九日間で十六万人の観客があつても

ラックは今回のために新調されたもので、事前協議の際図面の手直しをして種々注文を出しておいたが、それ以上の出来栄で、特にヴァンのボディが運転席の方にスライドして荷台へ左右後の三方から荷物が直接積み込めるようになっていたのは感心させられた。作業は七時過ぎに完了し、夕食の後九時四十分、大勢の人に見送られて揚州へ向けて出発した。

雨は夜半に止んだもののトラックにはヒーターがなく、しかも運転手は眠気覚ましのために窓を開け放して走るため、防寒具の用意がない我々にとってはたまつたものではなかった。運送に当たった上海市汽車運輸公司第六場は、積み荷と同重量の鉄塊を積んで振動測定器を設置の上数回走行訓練を行ったというだけのことはあつて、最高速度時速三〇キロメートルの安全

揚州市・大明寺における鑑真和尚像解梱

取り立てて混乱するような事態は起こらなかったが、これは監視・整理に当たる職員の手慣れた誘導にもよるものと思われる。観客側も二十余枚の写真パネル（唐招提寺関係の）を丹念に鑑賞し、ノートを取っている人を見れば見かける状況で、三十分おきの会場見回りに出ると学習したの日本語で突っ込んだ質問を浴びせられることも少なくなかった。中にはスケッチをする人もおり、鑑真像に感動して詩を認め届けて下さる老人もあつた。

約三キロメートル離れた最終会場の法源寺は、唐代の遺跡で、将来仏教協会の研修所に予定されている所である。周囲は回教徒が多い地域であるが、歓迎は前と同様で、彼らの休日にも当たる木曜日には、五万人を越える観客を迎えた。しかし、警備・整理要員は歴史博物館のスタッフ

北京市・中国歴史博物館の会場風景

運転で、しかも道路はすべて舗装を仕直しており、一〇〇メートルおきには警官と解放軍の兵士が立ち、対向車の通行を一切止めるという徹底ぶりには驚嘆させられた。真夜中でも窓を開けて通行を見守る人もいたが、旅程半ばの無錫で夜が明けて以降は沿道に人垣が出来はじめ、人民公社からは畑の畔道を走って迎えに出て来る人々の姿が多かった。長江の右岸鎮江からフエリボートに乗って対岸に渡るコースが選ばれたが、船着き場には小・中学生の歓迎陣が鉦・銅鑼・太鼓・笛の拍子に合わせ、両手に持った花と旗を振りながら「歓迎・歓迎・熱烈歓迎」と謡いながら踊る姿には感激のあまり思わず涙を流し、新生中国の姿を鑑真和尚に肌で早く感じてもらいたいという感慨にひたされた。約三十五万人の歓迎を受け午後四時に揚州の会場大明寺に到着した時は、十八時間余に及ぶ自動車行の疲れも興奮で吹き飛んでしまつていた。

大明寺は劉宋代に建立され、鑑真和尚が住寺として戒律を講じていた寺で、明代に法浄寺と名が改められたが、今回の回国を記念して大修復を行うとともに、旧寺名に復されたのである。四月十九日に行われた開会式には和上ゆかりの東大寺・興福寺・大安寺と西大寺・泉涌寺の管長も列席され盛大な歓迎行事が行われ、中国側では大雄宝殿で百人を越える僧侶の法要が営まれた。十時半から一般公開に移ったが、群衆はひきも切らず押しかけ、四百人からいる観客整理要員でも扱いかね、しばしば閉門して態勢を立て直して入場させる有り様であつた。中国における鑑真和尚の評価は高く、小中学生もその存在を知っていることである。入場券は歓迎委員会から職場ごとに日時を指定して無料

フがそのまま動めて下さつたので、経験を生かし、混乱もなく、七日間十八万人を無事にさばくことができた。境内は門から鑑真像を安置する経蔵間まで二五〇メートルの距離があり、その間五つの建物に中国の文物が展示されていく。適度に観客を散りばめることができたのも中国側の配慮に負うところが大きい。当寺は五時で閉門になるが、一般観客は四時を目安に一応終了し、以降は各界の要人を中心とした展覧と見られたのも中国らしく、我々が引き上げる時には駐車場に「紅旗」が十台近く並ぶことも少なくなかった。

いづれにせよ今回の展覧は観客五十万人を越える大成功で関係各位に対し深く感謝する次第である。本展覧会は、文物交流によつて日中友好の太い絆を結ぶことを最大の目的としたが、それに加えて歴史上の先覚者鑑真和尚を通じてより親しみのある友誼と、和上の里帰りという宗教性をも含んだ気持ちの通い合いを生んだことは誠に有意義であつた。

揚州では「風月同天」という揚劇（揚州オペラ）が演じられ、北京では「鑑真東渡」という話劇（新劇）も上演され、鑑真和尚に関する論文・文獻も多数発行され、新聞は連日にわたつて関係記事を載せるなど、まさに鑑真年を思わせる状況であつた。和上の言葉「山川異域、風月同天」の意味をあらためて見送りの中、北京空港を出発し、「第七次鑑真東渡」は何の支障もなく成功し、翌日御影堂に尊像を無事安置した。エピソード等数々あるが、紙数も尽きたことゆえ、ここで擱筆することにした。

（写真は朝日新聞岸根記者の撮影である。）

国立劇場 ニューズ

歌舞伎鑑賞教室 (大劇場)

解説 歌舞伎のみかた

歌舞伎 義経千本桜

九月四日～二十五日

●かいせつ

原作は今から二三年前の延享四年(一七四七)十一月に初演された人形浄瑠璃。竹田出雲・三好松洛・並木千柳による合作。「菅原伝授手習鑑」が前年、「仮名手本忠臣蔵」が翌年と、つまり歌舞伎を代表する三大名作が、この三年間に続けて発表されている。外題は「義経千本桜」というように、「義経記」の世界を扱っているが、義経役はむしろ劇の進行役で、芝居の中心は初音の鼓にまつわる狐忠信の筋と、壇の浦で義経によって討ち滅ばされた平家の武将たちの後日譚である。今回はその初音の鼓の方の上演である。

●あらずじ

「道行初音旅」 静御前は悲しい義経が隠れていると聞いた吉野山にやってくる。あたり一面は満開の桜、そして肌身には愛する人の形見の鼓を離さずにいる。ふと、付き従っている忠信の

姿が見えないのに気づき、静は鼓を打つと、その音に引き寄せられたかのようには忠信が現れる。忠信は主君拜領の鐙を木の切株に供え、静がその上に鼓をのせて、二人は義経を偲び、いまの悲運を思つて涙を流す。形見の鼓をじつと抱きしめる静、忠信はうっとりとした眼を注ぎ、静のあとに従うのだった。



忠信(尾上菊五郎)

「河連法眼館の場」 吉野の河連法眼の館にかくまわれている義経の所へ、佐藤忠信が義経の急を聞いて駆けつけてくる。しかし義経は、都落ちの際、愛人の静と初音の鼓を預けたのが当の忠信であったので、静がいらないのを不審に思い厳しく詮議する。そこへほどなく、もう一人の忠信が静を伴って館へ到着したとの知らせ。二人の忠信の出現に、なおなお不審を抱く義経は、詮議を静に任せ先に到着した忠信を引き連れ奥に入る。静は旅の最中、忠信の姿を見失うたびに、初音の鼓を打って彼を呼び出したことを思い出し、鼓

を打てば不思議や、そこにそのもう一人の忠信が姿を現す。怪しと、静が本体を問いつめると、似せ忠信は「私は初音の鼓の皮に張られた狐の仔で、親を慕つて従い来たのだ」とその悲しい心情を吐露する。聞く義経も、これまでの忠勤と、その孝心を賞で、仔狐に初音の鼓を授ける。喜ぶ仔狐は、今宵この法眼の館に、悪法師の横川覚庵ら衆徒が夜討ちをかける計画があることを告げ、鼓をいただき、桜の樹々の間に消えていく。

■文楽 (小劇場)

- 一部 新薄雪物語・団子売
二部 摂州合邦辻・染模様妹背門松

九月六日～二十一日

(十四日より昼夜狂言入替)

■舞踊鑑賞教室 (小劇場)

歌舞伎舞踊の味わい方―女形―

九月二十六日

■演芸 (演芸場)

- 漫才秋の名人会 九月六日
定席・中席 九月十一日～二十日
花形新人演芸会 九月二十一日
浪花節名曲撰 九月二十八日

編集後記

○夏の風物詩といえば、夏祭り、盆踊り、花火大会等いろいろある。小さな地域的行事でも、子供の頃の夏休みの思い出と重なって忘れられないものである。先般公表された文部省の調査報告書によると、八割以上の人が祭りや地域の運動会など、心のふれあいや連帯感を強めるような行事・活動に参加しているとのことである。最近、都会でも祭りなどの行事が盛んになってきているが、人々が心のふれあいを求めているのであろうか。
○今月は、水野正好氏の巻頭をいただいた。いみじくも筆者が、平安人を沈む夕日を見ることに想起「す云々」と述懐しておられるが、もの言わぬ遺跡でも永年埋蔵文化財の保護に尽力されている氏の情熱が、読者をはるか平安人の西方極楽往生の日想観の世界へなまなましく導いてくれるようである。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八二二四一(代表)

「文化庁月報」八月号

昭和55年8月25日印刷・発行
(通巻第一四三号)
編集文化庁

発行所 株式会社 きょうせい

本社 千葉県東部中央区東津田4番12号
営業所 千葉県東部新習志野五軒町52番地
電話(〇三)二六八二二四一(代表)
振替口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)